

《翻 訳》

ニューヨーク知識人の隆盛

— 『パーティザン・レビュー』誌とそのグループ— (第一章)

テリー・A・クーニィ 著
大西 哲 訳

The Rise of the New York Intellectuals: Partisan Review and Its Circle (Chapter One)

Terry A. Cooney

translated by SATORU OHNISHI

キーワード

ニューヨーク知識人 (New York Intellectuals), 『パーティザン・レビュー』誌 (*Partisan Review*), コスモポリタニズム (Cosmopolitanism), ラディカリズム (Radicalism), ユダヤ系移民 (Jewish immigrants)

第一章 根源と源泉

ニューヨーク！ ニューヨーク！ この都市は非常に多くの点で、自分のためだけに存在している地域である。北アメリカで唯一、この都市だけがその文化的な磁力で、現代的な経験の豊かさで、そして興奮の受容力で、偉大なヨーロッパの中心地と拮抗している。合衆国の中で、ここが他の全ての都市以上に、アメリカ人が自分たちの社会的、政治的、また文化的な諸々の首都に対して感じてきた、あの魅力と反発の混じりあったものを生み出している。ピオリア〔訳注：イリノイ州中北部の都市〕のニューヨークの見方に、そしてハドソン川を越えた土地へのニューヨークの見方に、魅惑と疑惑とが結合している。ひとつの地方が、別の地方を懐疑的に眺めている。

一つの知識人グループに「ニューヨーク」という名の焼き印を押すことは、彼らが生活し、仕事をする場所を確認する以上の作業である。それは都市の共鳴を呼び起こすことであり、また一つのグループとして、彼らがそのグループの人生の流れの中で水浴びをし、またそのグループの流れを増大させたことを示唆すること

である。ニューヨークは20世紀の20年代までに、アメリカの文学生活の中心、政治的、文化的ラディカリズムの養育場となり、また世界最大のユダヤ人社会の故郷の一つになっていた。ニューヨーク知識人の研究においては、これらの特徴の一つ一つが注目に値する。

「現代作家としてのユダヤ人」の起源を考察して、アルフレッド・ケイジンはかつて、「ニューヨークがなければ、明らかに全ては違っていただであろう。だがニューヨークがなければ、移民の叙事詩もなかったし、アメリカも存在しなかったであろう」と挿入句でコメントをしたことがある⁽¹⁾。ある見方に立てば間違いはないし、別の見方に立てば馬鹿げてもいるが、このような言説は、話し手の最も基本的な仮定について、それが何を暴露するかという点で、主として興味深いのである。ニューヨークの数多くの知識人にとって、国家的でもあり、また同時に個人的でもあるアイデンティティの意識は、少なくともその形の一部分を、ユダヤ人としての移民経験から、またニューヨークの独特なエトスから取ってきたものであった。背景の影響力は必ずしも容易には認められなかったけれども、ニューヨークでユダヤ人として成長した経験は、当然、ニューヨーク知識人の理

解を組み立てる際に、最初の層として役立つかもしれない。

アメリカにやって来たほぼ全ての人々にとって、移民という経験には、慣れ親しんだ生活パターンから根こぎにされることや、一連の衝撃が付き物だった。だが、第一次世界大戦前の30年間に新世界に蝟集してきた東ヨーロッパのユダヤ人ほど、その変化の度合いや強度が著しかったものは、他にはほとんどいなかった。身体的、文化的、そして経済的な変化は、相互に積み重なって移民たちを混乱させ、彼らユダヤ人の社会生活を作り変えた。アーヴィング・ハウが書き留めたように、アメリカへ、そしてニューヨークへやって来たユダヤ人は、技術的に進んだ西洋ではもっと以前に終わっていた経験を凝縮して体験し、いろいろなやり方で、各自が独自の産業革命の体験をするように思われた⁽²⁾。以前は小さな町や村に結び付けられていた文化が、突然にニューヨークのロウアー・イースト・サイドに、西欧世界で最も人口密度の高い地域の一つに集められた。伝統的な身分のパターンは崩壊した。以前には、孤立することで守られていた慣習や考えが、対立する習慣や観念の渦巻く染色用の大樽の中に投げ入れられた。それまで広範囲に浪費されていたエネルギーが、いまやユダヤ社会がニューヨークの内側に向かって破裂する中で、劇的に交じり合った。

知的、文化的な生活において、こうした集中はすでにユダヤ人の間で進行中であった変化を拡大し、加速するようであった。産業革命と同様に、啓蒙運動も東ヨーロッパには遅れてやって来た。だが19世紀末までには、西欧の文学思想や政治思想が「ハスカラー」、すなわち「ユダヤ啓蒙運動」を通して、東ヨーロッパの都会化されたユダヤ人のもとに届いていた。そしてこうした思想は、昔からの伝統と同じ船に乗って航海した。周りを取り囲むアメリカ文化の影響がなかったとしても、ロウアー・イースト・サイドに住めば、直接の接触や迅速な意思の疎通が単に可能であっただけでなく、また避け難

いことであったために、西欧の思想は急速に広まったことであろう。ユダヤ人社会の集中は、文化的な可能性が爆発することを意味した。偏見、社会的地位、宗教や伝統による障壁は、大部分がこなごなに爆発され、通常そうした爆破に伴うずらりと並んだ機会と不安定の入り交じったものが解き放たれた。

時とともにユダヤ人は、他のグループのパターンと比較して極めて迅速に、さまざまな種類の成功をもたらした熱意を持って、自分たちに開かれた可能性を追求した。ユダヤ人が農民だったことは一度もなかった。そこで彼らには、「彼らの欲望を抑え」、彼らの同化する速度を遅らせたかもしれない「農民の宿命論や、農民の上位者への服従の習慣」に欠けていた⁽³⁾。一般にユダヤ人は、込み合った労働市場で競合することを避け、1910年以前には、大部分が経済的な差別を免れていた。一番重要なことは、ユダヤ文化が教育に対しては明確に積極的な態度を取っていたことである——他の多くの移民グループの大多数のメンバーとは異なり、大半のユダヤ人はすでに読み書きができていた。アメリカはロウアー・イースト・サイドとブルックリンで、学問の情熱的な追求を許し、また奨励する自由と機会を同時に提供し、教育をきわめて重要な課題とした。そこである歴史家は、次のように結論付けている。「ユダヤ人の学問に対する伝統的な態度と、合衆国における無料の公立学校の存在との関係が、おそらく東欧のユダヤ人のアメリカ文化への適応における中心的な要因であろう。」⁽⁴⁾

やがてニューヨーク知識人となる人々にとって、教育は最終的な地位と成功への細い小道ではあったが、その過程はほとんどの場合、苦痛に満ちたものであった。親も子供も非常に高く評価した学問が、各世代をばらばらにし、伝統的な文化とアメリカという環境との葛藤を増幅する一連の緊張の場となった。日中、ユダヤ人の子供たちは、公立学校では英語を話すことを要求され、家庭ではイデッシュ語の方を聞いたり使ったりしがちだった。公教育の成立に貢献

したアメリカのナショナリズムとプロテスタントの道徳をたっぷり教え込まれたので、多くの若いユダヤ人が公立学校と同時に通っていたユダヤ人学校の授業との間に、ある種の不調和が生まれた。だが第二世代のユダヤ人が、その中で自分たちの名をあげたり、安定を勝ち取ったりすることを切望した、より大きな世界を開くカギは公立学校が握っていたし、またそれらの公立学校は若いユダヤ人に、環境に順応して、過去と縁を切り、地位を確保しろと猛烈な圧力をかけた。新進の知識人の経験は、それぞれの生い立ち、運、そして学校教育を正確に何年受けたかで違って来るかもしれないが、東欧の移民の子供たちが成長した30年以上の間、このパターンはほとんど変わらないままであった。

連続する葛藤は、激しい動揺、あるいはゆるやかな変容によって特徴づけられるかもしれない。どちらの場合でも、ある種の傾向を持った若い知識人にとって、その道は伝統的な文化や社会から一歩一歩離脱する方向に繋がっていた。多数派の文化を代表するものたちは、大喜びでこうした過程を援助した。第二世代の経験が始まる時期に登場するジョセフ・フリーマンと、その経験の終わる時期に登場するノーマン・ポドレッツの双方に対して、公立学校の教師たちは、自分たちの前途有望な生徒のために、外の世界や上の世界へ向かう道をはっきりと示すことに特別な関心を寄せた。どちらもがマンハッタンに、「本当の」アメリカへの象徴的な旅に、連れて行かれた。いずれもが、金持ちの家庭で例証されるにせよ、上層中産階級のお店やレストランで例証されるにせよ、プロテスタント資本主義という異文化に敬意を払うように求められた。さらにそれぞれが、このよりよい世界で、礼儀作法やお金を通して、社会的な地位を追求することを申しつけられた⁽⁵⁾。

教育は、単に聡明な学生を拡大された世界に接触させただけでなく、勉強が進むに連れて、次第に同じような学問的関心を持つもの同士や異教徒とも接触させた。まだ駆け出しの知識で結び付けられた小さな友人グループは、親

や社会をともに、かなりの不快な思いで眺めた。近隣関係のよしみがたとえどんなものであれ、移民がとる行動は度し難いほど偏狭で、腹立たしいほど臆病であるように思われた。親たちは痛ましいほど経験が限られており、希望も小さく、危険を恐れていた。若い頃を回想して、何度も何度も、ユダヤ人の知識人は二重存在の意識について述べてきたが、それは家庭生活と自分の選んだ友人との交際の間にも生まれる裂け目にまたがっていた⁽⁶⁾。

家庭内での緊張、ユダヤ人社会の支配力と外の世界の磁力との緊張関係は、世代間の葛藤を反映しており、ユダヤ人の知識人家庭に限定されるものでもなければ、ユダヤ人に限定されるものでもなかった。より大きなアメリカを抱擁したい、民族社会を超えた向こうに成功を見出したいという第二世代の願望は、多くの移民グループの物語の中で、古典的なパターンの特徴となっている。それでもやはり、ユダヤ人に関して言えば、この断絶がさらに鋭く、状況はさらにいっそう緊張していたようであった。非常に長いあいだ自制していた民族にとって、機会があるという雰囲気は、——個人としても、家族としても、あるいは民族全体としても——、見逃してはならないチャンスであった。だが、成功と希望の実現に向かって大きな一歩を踏み出せたのは、移民世代ではなかった。移民たちは、自分たちもそのように見なしていたように、「過渡的な世代」であった。成功するかどうかは、子供たちの肩にかかっていた。ユダヤ人移民社会の文化は「その息子たちに全面的に捧げられた文化」となった⁽⁷⁾。

そして、舞台中央に登場したのが息子たちであった。男性だけのクラブの雰囲気が初期のニューヨーク知識人たちの周辺には漂っていた。ときには若い女性たちも居合わせて、ときには彼女たちのことも触れられたが、平等に扱われることはめったになかった。初期の時代に知的に名をあげた女性は、決意と才能によって、そしてときには夫や仲間のコネによって成功をおさめたのであり、文化全体により支持さ

れた男性と同等の激励や機会によってではなかった。この息子たちは選ばれた息子たちであり、多くの場合、愛情と援助を与えられたが、それらに付きものの期待——多くのものには実現困難だと判明した期待——にも、十分に気づいていた。1940年代にニューヨーク知識人の若手の代表者たちと、次いで年長の代表者たちが、エッセイあるいは小説で、ユダヤ人の体験と彼ら自身の感情とを論じ始めたときに、家族のドラマと彼らが罪の意識を持っているか、あるいは持つべきかという問題が、十分な注目を集めたものであった。

だがこうした感情も、若者たちの進路を変えることはなかった。ある若者にとっては、親たちの狭い世界からの脱出が彼らの初期の経歴の中心的なテーマであり、彼らは可能な場合でも、進路を変更したいという欲求は一切抱いていなかった。1940年代初期のアルフレッド・ケイジンは、後の回顧録の中に出てくるケイジンとは違って、この点をはっきりとさせていた。「自分はたんに押し付けられただけの信仰に対する戦い、そして感傷的で狂信的な排他主義に対する戦いによって、最も深い影響を被ってきたと思う。ユダヤ系アメリカ人にとって、少なくとも私のような環境にあり、私の世代に属するユダヤ系アメリカ人にとって、臆病と献身を取り違え、地方根性（すなわち、白人の自己推進的な生活に根を持つ疑い深さ）と意識的な信仰を取り違えることが、どれほど容易であるかを私は知っている。」⁽⁸⁾「押し付けられた信仰」、「感傷的で狂信的な排他主義」、「臆病」、「地方根性」——ケイジンのこのリストは、若い知識人が捨てたいと思っていたものをかなりよく要約している。しかし、彼らは何処に向かっていたのか。彼方の世界で、彼らを引き付けたのは何であったのか。

多くの民族集団の第二世代に属するメンバーのあるものにとって、目標は急速な同化——受け入れ社会の価値、目的、経済的標準を十把ひとからげに採用することを通して、「アメリカ人」になること——であったろう。この選択肢

を喜んで受け入れる傾向があったと思われる若いユダヤ人の知識人にとって、支配的な文化の行動様式の中で大目に見たものがたくさんあった。ユダヤ人の宗教とユダヤ人の慣習は、たいていのグループの慣習との相違よりも、プロテスタント主義のアメリカの宗教や慣習との相違の方が大きかった。それゆえ摩擦の原因は、儀式上のものであれ、それ以外のものであれ、たくさんあった⁽⁹⁾。1920年代の移民制限と各種取り合わせた自国民保護の無作法な行為とで頂点に達したよそ者の憤りとラディカルの恐怖（しばしばユダヤ人が関係していた）とがあって、聡明な若いユダヤ人の中で、より大きな社会の敵意を無視することができるものはほとんどいなかった。あるものは「ビジネスマンという紋切り型の身分証明から逃れられ、個人として仕事ができ、そして彼らの鋭敏な知的能力を十分に発揮できる場である」知的な専門職に、社会的な地位と安定を得ようと努めた⁽¹⁰⁾。だがもっと自意識の強い知識人たちは、アメリカの中産階級やその物質主義的な価値に対する完全な屈服だとして、こうした人生航路を軽蔑する傾向があった。

ある若い知識人グループを引き付けたものは、文化的な将来性、文学の伝統、社会的な抵抗のパターンであり、その文化の中に淵源が深く埋め込まれているとはいえ、それらが一緒になって、中産階級の文化を拒絶する根拠を与えてくれた。第二世代の才能豊かなものたちは、人文学における幅広い西欧の伝統に、とくに文学で表現された西洋の伝統に魅了されて、ユダヤ人社会から引き抜かれた。そして彼らは、その伝統と知的生活の理想への忠誠心を示すようになった。多くのものにとって、広範囲な領域をカバーする西文学との初めての出会いの瞬間は、すさまじい興奮と熱狂の時であり、閉ざされた戸がぱっと開いて、未知の世界が拓かれた時であった。フィリップ・ラーヴは、晩年に一人の友人に向かって、彼がウクライナの村にいた八歳か九歳の頃、ロシアの兵隊がドストエフスキーとトルストイの本をくれた時のことを

思い出して語った。ラーヴの文学への関心と（イディッシュ語と対立する）ロシア語への真剣な取り組みは、このときに始まった⁽¹¹⁾。若い知識人と西欧文化とのこのような出会いは、あるものにとっては、ほとんど原型的な体験と思われるようになってきた。「地方出身の若者が…19世紀の小説において、偉大なる世界と遭遇した典型的な人物であるとすれば」、20世紀において、その役割を全うするのは「ユダヤの知識人」である、とアルフレッド・ケイジンが示唆したことがあった⁽¹²⁾。

彼らの教育への関わりと関連する普遍的なことが大事だという感触は、若い知識人がユダヤ人社会に見出した狭い関心とは反対のもののように思われた。40年代に大学に通っていたノーマン・ポドレッツは、地下鉄で毎日、母方の諺からヨーロッパ文学へと旅をした。彼が遭遇した西欧文化は、その「寛大な、超越した抱擁」の中に、「最もすぐれたユダヤの伝統」さえ含む、あらゆる知識を包含しているように思われた。ニューヨーク知識人の社会や『パーティザン・レビュー』誌と親密な関係にあったライオネル・トリリング、F・W・デュピー、リチャード・チェイスのように、コロンビア大学の男子学寮の学生であったポドレッツは、大学の教員とともに、彼らの信奉した遺産はとりわけ『西欧的』であるが、このことはごく取るに足らない制限であるように思えた。「われわれの考えでは、われわれがコロンビア大学で勉強しているこの文化は、ある特定のグループの人々の創造物でもなければ、所有物でもない。それは時空内に存在するのではなくて、精神のある超越した領域に存在する、普遍的なものの貯蔵所であった」⁽¹³⁾

もちろん西欧文化を信奉しても、ユダヤ人知識人のアイデンティティの問題がなくなるわけではなかった。文学の豊かな広がりを掴もうとする努力と、ある特定の遺産を持っているという自覚との間には、ニューヨーク知識人の特徴となった緊張が存在していた。一般的に言えば、そのような緊張は彼らに独特のものである

とはほとんど言えなかった。レオン・ヴィーゼルティアーは、「ユダヤ人のアイデンティティの歴史は、普遍主義と個別主義の間の緊張」を中心に「書くことができる」と述べたことがある。だが、かかっている圧力が、たとえどれほどありふれたものであったにしても、ニューヨーク知識人が特別のアイデンティティを形成し、ヴィーゼルティアーがもっと一般的に用いた言葉を使うと、彼らが「その独創的な、また批判的な切れ味」を見出したのは、そのような緊張からであった⁽¹⁴⁾。

ユダヤ人知識人が、ユダヤ人の文化と異教徒の文化の間にある空間に、——あるいはそれらを越えた空間に——、自らを位置づけるパターンは、全く新しいことではなかった。20世紀の初頭までに、このモデルは十分に確立されていて、洞察力の確かなソースタイン・ヴェブレンが、ユダヤ人のヨーロッパ文化への例外的な貢献に対する説明をこのモデルの中に見出したほどであった。ヴェブレンの示唆によれば、ユダヤ人の知識人は、「自分の生まれ落ちた因習の体系の中での安全な場所を失うという代価を払ってのみ、また彼が投げ込まれる異教徒の因習の体系の中で同様な安全な場所を見つけられないという代価を払ってのみ」、偉大になるのだ。「…ユダヤ人の知識人は知的な平和をかき乱す存在になるが、それは知的な旅人となり、中間地帯での放浪者となるという代価を払ってのことである。」⁽¹⁵⁾ 見たところ、ウェブレンはこの問題に関して、ほとんどの社会学者に影響を与えていないようだが、1928年の有名な論文で、ロバート・E・パークは自分の境界性の理論を立論するために、二つの文化の同じ問題を取り上げた。パークは、ユダヤ人が二つの文化にかかわり合うことから出現する、ある特定のパーソナリティのタイプ、いわば「文化的な雑種」を発見した。ユダヤ人は「二つの文化、二つの社会の欄外にいる人間で…、解放されたユダヤ人は、歴史的に、典型的に、欄外の人間（マージナルマン）、世界で最初のコスモポリタンで、世界市民であったし、現在もそうであ

る。』⁽¹⁶⁾

第二次世界大戦後、こうした伝統的な文化と受け入れ文化の双方からの分離という考え、社会の欄外に特別な位置を占めているという考えが、ニューヨークのユダヤ知識人の自己分析で、欠かせない概念となった。「失われた若き知識人：二度疎外された境界人」⁽¹⁷⁾ というようなタイトルの論文が現れた。自分自身の立場をこのように自覚して公然と検討すること、若いユダヤ人のこうした体験の一般化は、30年代に目立ったわけではない。だがその期間に、ニューヨーク知識人の間に出現したパターンは、文化間の相互作用に、個人的、集合的アイデンティティを確立しようとする努力に、そして自分たちの経験が現代の人類社会にとって中心的なものであるという——最初は暗黙の、しかし後には明白な——仮定に、負うところが大きであった⁽¹⁸⁾。

ニューヨーク知識人の文学的な好み、政治的な選択、多彩な経歴は、彼らが西欧文化やその普遍主義的な考え方に関与していたことを証明する。さらに最初に承認すべき点は、ユダヤ人として成長し、ニューヨークで生活をするという経験が、彼らの社会的な、知的な見方の枠組みを作り、形成し、ときには制限したことである。アーヴィング・ハウは「ユダヤ人的な言及や、モチーフ、仲間内の冗談、そして明白なテーマが、いかに頻繁に文化的なコスモポリタニズムやマルクス主義の国際主義の表面から飛び出したかを見るには、『パーティザン・レビュー』誌の最初の20年間を検討することが、魅力的な課題になるであろう」と言ったことがある。ハウは、ギルバート・セルデスが「われわれの礼儀正しさやお上品さの迷信について、素晴らしい無頓着さを」示したアル・ジョルスンやファニー・ブライスのような人気のあるユダヤ人の芸人の「悪魔のごとき」奔放さに注意を払っていたことに触れながら、「1930年代と40年代に『パーティザン・レビュー』誌がアメリカの学会に吹き込んだ軽蔑と、ましてや不安と恐れが入り混じった感情を覚えている年配の

人なら誰でも、セルデスがジョルスンやブライスについて言ったことが、ラーヴやグッドマン、ローゼンバーグやアベル、フックやマクドナルドにも同様に当てはまることを認めるであろう」と主張している。アルフレッド・ケイジンによれば、ユダヤの文筆家には、「しばしば他の人々には説明ができないほど度を越しているように思われる激しさ、つまり多くの矛盾する感情への親密さ」があった⁽¹⁹⁾。

多くのニューヨーク知識人の社会的なアイデンティティを形成するもう一つの条件は、30年代と40年代の態度や経験が、10年、20年と年を重ねてきた時に、初めて意識的に承認され始めた。こうしてハウは、次のように述べることができた。「今になってようやく私は、私たちが公認の社会から自らを切り離そうと決意していたにもかかわらず、私たちのうちの多くのものがユダヤ系移民の家系の出であるという事実、ニューヨークでは今でも、ユダヤ人がなかば見えない形で、たくさんの近隣社会や多数の制度のうちに正真正銘の社会を形成して、しかもその社会から私たちは一種の庇護を受けていたという事実によって、どの程度まで私たちの生活が形作られていたかがわかる。」スターリン主義者の隊列の中でさえ、「ユダヤ人であるという事実は驚くべき点で重きをなしていた。」ラディカルと知識人は、自分たちの出自を克服しつつあるとか、階級や民族を越える信念に基づくグループを形成しつつあるとしばしば主張し、時にはその通りであった。しかしユダヤ人社会にとって、現実はずっと異なっていた。「あなたの信じているもの、あなたが信じていると言ったものは、とうていあるがままのあなたほどには重要ではなかったし、あるがままのあなたは、とうていあなたが想定したいほどには選択の問題でもなかった」⁽²⁰⁾ こうして若いユダヤ人の知識人は、もっと大きなニューヨーク社会の、しばしばそれとは分からない保護下にありながら、家族や伝統への反逆者であったり、自由に思想や政治の実験を行った。

若い文筆家の考えは、とりわけ都市という環

境の痕跡を示していた。第二世代の熱心に奮闘する若者は、不況にあってびっくりしたが、たくさんラディカルな党派がいつもこの都市に集中していたニューヨークは、無数の理論の背景となる社会的な規範になった。ライオネル・アベル、ニューヨーク知識人の創設世代の一員である彼が、自分自身について書いたことがある。「私はエルサレムに行きたいという願望もなかったし、アテネで暮らそうという期待もなかったし、ローマにもほとんど関心がなかった。私は18歳であった。当時、いったい私がパリについて何を知っていたらどうか。私の目的といえば、ニューヨークで——それ以来、実際に私が暮らしたところで——暮らすことだけであった…。それは一つの都市であった。都市はそれ以外考えられなかった」⁽²¹⁾アベルはこうした言葉で、彼のニューヨーク熱を強調したいと願っていたが、他の都市をけなすつもりはなかった。だがエルサレム、アテネ、ローマ、そしてパリへの暗黙の優位性が示されている。ニューヨーク知識人はいつまでも18歳だったわけではなく、ヨーロッパ文化についてもおおいに学んだ。しかしある程度まで、ドイツとフランス、イタリアとイギリス、モスクワとエルサレムに対する考え方は、ニューヨークを中心とする遠近法によって判断しなければならないという確信が、彼らの仕事から消え去ることは一度もなかった。

ニューヨークへの集中は、地理的な前提と文化的な判断との混合を助長した。「世界でもっとも長い旅の一つと言え、ブルックリンからマンハッタンへの旅である」というノーマン・ポドレッツの意見は、彼が強調したいと願う社会学的な旅に対する劇的なイメージをもたらした。同時にその言葉は、知識人の世界の物理的な狭さを、オレゴン街道がブルックリン橋の長さでしかない人々の制約された見方を暴露している⁽²²⁾。この制限された都市的な見方の限界は、ニューヨーク知識人がハドソン川を越えた田園地帯や、そこに住む人々の態度を扱おうとする際に、繰り返し姿を表した。ことに南部人

は、30年代の知識人のドラマの中では、政治においても文学においても、反動的な役割を演じていた。都会人の理解したマルクス主義は、彼らの農民への不信を深めた。知識人の政治での変化にもかかわらず、田舎や西部の政治運動は彼らの神経をいらだたせ、いつでも脅迫的に思われた。こうした不安はまったく馬鹿げたものでもなかった。クークラックスクリンやカフリニティーズのようなグループが、実際に都市の、東部の知識人を攻撃し、ラディカルな思想をけなし、反ユダヤ主義を助長したからであった。しかし知識人たちは、田舎の運動や田舎の理想に、不完全で自己中心的な解釈という反応を示し、田舎政治のより有望な可能性や寛大な精神を無視する一方で、不安と頑迷の伝統を——そして暗黙のうちに、ファシズムの可能性を——見いだしていた。間違いなくこうした態度の背後には、都市という一つの地域での限定された見方があった。

ニューヨーク知識人のものの見方の中に埋め込まれた限界のいくつかを提示したからといって、彼らの知力、彼らの言説の刺激、アメリカの知的生活への彼らの貢献の度合を、決して否定することにはならない。実際に主観的な見解の束縛を逃れられるものはほとんどいないし、それにおそらく大半のものが、逃れたいとも思わないだろう。ニューヨーク知識人は自分たちの過去から、直接的な論争のスタイル、アイデンティティに関する関心と自分たち自身の場所を確立する必要性、自分たちが中心であり、ニューヨークが中心であるという信念、西欧文化や世俗的な考えや批判的な知性への献身、そして彼らの最悪の誹謗者ですら魅力がないとはまず思わない世界に関与しようとする熱意を開花させた。

ニューヨーク市には、若き知識人が捨て去りたいと願った制度や近隣社会と並んで、しばしば彼らを魅了した文化のあらゆる興奮と約束を象徴するもう一つの近隣社会があった。その近隣社会には、芸術に興味を持った向上心あふれる若者に、ニューヨークが意味したものの多く

が備わっていた。

(ニューヨークについて、) いちばん素晴らしいことの一つは次のことである。博物館、劇場とオペラはもちろん、人間的な見地からこの街に欠かせないすべてが、ブリーカー通りと14丁目、二番街とグレニッチ通りに境を接していた。ニューヨークには、これ以外に住宅街はなかった。この地域以外に住むものたちは、パーリアでしかなかった——いや存在さえしていなかった…。ウォール・ストリートなどイリノイ州にあってもいいくらいだった。そしてマディソン・ストリートは、実際にはオハイオ州の一部であった。ニューヨーク市とは、グレニッチ・ヴィレッジのことであった⁽²³⁾。

街の他の部分は、田舎のしきたりに根を持つ国民文化やプロテスタントの道徳という点で、イリノイ州やオハイオ州と仲直りをしてよかった。しかしグレニッチ・ヴィレッジは、その特性を、その珍しいレストランや劇場を、それから人々の混じり合いや、マーク・トウェインからユージン・オニールに至る伝説を、主張したものである。20年代後半や30年代に成熟期を迎えた若き知識人にとって、グレニッチ・ヴィレッジは文化再生の潜在力を示す強力なシンボルであった。それは先行する世代の華々しい功績から、いまだに輝いているようであった。

他のどんな時期よりも、1910年代はグレニッチ・ヴィレッジに牽引力を与えていた。25年後にアルフレッド・ケイジンは、まるでこれらの年月の魅力が単に当座のものではなくて、永遠のものであるかのように書いている。「1910年から1917年の世界は、アルカディアに変わったワシントン・スクエアであり、そこではいつでも障壁は倒されていて、常に雑誌は前途有望で、いつでも労働者がデモ行進していて、グレニッチ・ヴィレッジのあらゆる寝室で天才が芽を出しかけていて、いつでもイサドラ・ダンカ

ンが踊っていた、という今では月並みになった伝説を——ジョン・リードがバイロン風の英雄であり、メイベル・ドッジが女主人であり、ランドルフ・ボーンが殉教者であり、ヴァン・ワイク・ブルックスが神託を伝える人であるあの世界を——知らないものがあるであろうか。アメリカの他のどんな世代に、これほどまでに光り輝く青年期があったであろうか⁽²⁴⁾ 実際「コンコード・グループ以降のアメリカで、最初の偉大な文芸界」という、これほどロマンチックで光り輝く幻影に反応しないものがあったであろうか。ケイジンが10年代の若者たちのグレニッチ・ヴィレッジにアプローチする際の、まさにその調子、彼が当然これらすべてが知られていると考えたその気軽さなどが、この伝説がニューヨークの若き文芸知識人をいかに包み込んでいたかを暗示していた⁽²⁵⁾。

1910年代に沸騰するシチュー鍋であったグレニッチ・ヴィレッジでは、文芸ルネッサンスの追求が、ラディカルな政治を通して社会を作り直したいという希望と実に快適に共存していた。定期的に沸騰して表面に顔を出し、しばしば一瞬の栄光の後、また沈んだりトル・マガジンは、反乱への彼らのささげ物で、文化と政治とを混合せざるをえなかった。この時期のもっと重要な雑誌にとって、この混合は意図的であった。だが数誌が目指していた、原則に基づくバランスを達成したものは一誌もなかった。『マッシュズ』誌はジョン・リード——ケイジンの「バイロン風な英雄」——のおかげで、ラディカリズムの知的なロマンスの強力なイメージを提供できた。彼はストライキからストライキへと駆け回り、メキシコとロシアでの革命に関して、後世に残る報道をした。『マッシュズ』誌はまた、第一次世界大戦中の抑圧と編集陣の裁判を通して、ラディカルな殉教者列伝にも貢献した。だが後代の文芸知識人にとって、『マッシュズ』誌はでたらめで、あまり真面目とも思えなかった。ラディカルな30年代の中ごろに、ハロルド・ローゼンバーグは「文学的にも社会的にも」、そのラディカルな原則は「まっ

たく生き生きとしていた——退屈させないほど充分に色鮮やかな行動と外観であった」というコメントを付けて、それ以前の同誌を事実上お払い箱にすることができた⁽²⁶⁾。熱狂は人に訴える力があるが、それだけでは充分ではなかった。

政治との接触を維持しながら、高い調子の真剣さを求めて、文学への偏愛から、10年代の文筆家——あるいはもっと後の若い文筆家は——、別の拠り所に向かうこともあった。短命ではあったが非常に影響力のあった『セブン・アーツ』誌の紙面には、そしてこの雑誌に生命を与えたグループの著作には、おそらく10年代の文化的な反抗の先頭を切る表現があった。このことは『セブン・アーツ』誌が境界線のなさや思想の試食者として知られていた時期に、明確に定義された排他的なスタンスを示していたと言うことにはならない⁽²⁷⁾。だが『セブン・アーツ』誌は、その文学の実験主義、文化的ナショナリズム、社会批判、そして使命感の一切合切を通して、もろもろの態度の珍しいチームワークを示していた。

ランドルフ・ボーン、ルイス・アンターマイヤー、シャーウッド・アンダーソン、そしてポール・ローゼンフェルドが支援の「内部グループ」を構成していたが、実際にはジェームズ・オッペンハイム、ウォルド・フランク、ヴァン・ワイク・ブルックスが『セブン・アーツ』誌を動かしていた⁽²⁸⁾。ブルックスとボーンは親友で、この時期にはおおむね意見が一致していて、思想的な指導者の任を果たし、支配的な批判意見を表明した。彼らの思想の多くは一般的な環境に合致したものであり、彼らの最も特徴的な語句のいくつかは、彼らの専売特許ではなかったが、二人ともその説得力によって、アメリカの知的生活の主流に入る考えや用語を提供した。若いニューヨーク知識人で、直接的というよりは恐らく間接的な影響を受けて、30年代に経歴のスタートを切ったものも多く、自分たちが他の誰よりもブルックスやボーンの子孫であるという明確な形跡を示した。

ブルックスはその経歴の中で最も華麗な時期に、『セブン・アーツ』誌に入った⁽²⁹⁾。彼は1915年に『アメリカ成年に達す』を出版することで、ずっと以前に始めていた批評的価値と社会的見方に対する探求を仕上げていた。新たな自信と予言的なスタイルとで、ブルックスはいまや、やがて古典的になる用語で、一般的にはアメリカ人の生活を、とりわけアメリカの文学をめちゃくちゃにしてきた二重性——理想と現実、理論と実践、思想と行動との分裂——を攻撃した。

こうした二つの精神の態度は、かつてわれわれの用語では、きっぱりと「ハイブラウ」と「ロウブラウ」と表現されてきた…。アメリカ生活のどの側面がこの正反対のものに影響されないというのか。アメリカ生活のどんな説明がより中心的で、あるいはより啓発的であるというのか。どんなことにも人は、何か共通点があるとは思われないこの対をなす価値の率直な受容を見いだす。一方はきわめて明瞭な、きわめて偽善的でない超越論（「高い理想」）の仮定であり、もう一方はきわも物的な現実の同時受容である⁽³⁰⁾。

「ハイブラウ」と「ロウブラウ」とは、ブルックスがその分析ではっきり利用した弁証法的パターンにおいて、テーゼとアンチテーゼを構成した⁽³¹⁾。ハイブラウやロウブラウを超えた適切なジンテーゼが、ブルックスの情熱的に追求したゴールであり、あの成熟したアメリカ文化、あのイノセンスにいたる目的をもたらすものであった。

『アメリカ成年に達す』と同じ年に出版された『H・G・ウエルズの世界』において、ブルックスはアメリカのジレンマに対する解決策を提供するかもしれない一つの伝統——社会主義の未来像を通して芸術と社会をつなぐ伝統——を、ヨーロッパで発見したことを明らかにした⁽³²⁾。社会主義は世界の包括的な説明を、統一された観点をもたらした。こうした全体的

な見方から、ブルックスは——行動の側に立って——個人的なまた芸術的な表現を妨げる障害を暴き、また障害を破壊するために、資本主義的な産業社会の全面的な批判を要求することができた。同時に彼は——理想の側に立って——未来の有機的な社会、連帯のある社会、営利主義や競争がもたらす破壊的な衝撃を超えて、芸術と自由な個性が統合された社会の未来像を掲げることができた。社会主義の政治綱領それ自体は、実際にはほとんど関心を惹かなかつたが、文化と政治を統一する枠組みとして、現体制の出来合い批判として、その未来像を通して芸術への刺激として、社会主義は思想的には大変役に立った。

ブルックスはアメリカ文化の過去の大部分を、失敗の連続だとして拒否してきた。だがおそらく、アメリカ文学の遺産という構成要素を取り入れない国民文化は多少とも根無し草になることに気づいて、ブルックスは相変わらず全体を拒否しながら、断片を利用しようとする計画を見つけた。「使用可能な過去の創造」というエッセイの中で、ブルックスは「成功した事実」が文学史の中で見る価値がある唯一のものとは限らないと主張した。本当の課題は「傑作ではなく…、傾向を探求すること」、十分な発達には届かないものの「創造の衝動」に基づく試作を探すことだった。こうした何度も繰り返されるスタートを探り出すことで、知識人は「利用可能な過去を発見し、創案する」⁽³³⁾ ことができた。「利用可能な過去」という概念の中で、ブルックスはある意味で知識人が文化の伝統に関していつも行ってきたことを成文化したにすぎない——つまり彼らは、いつでも自分たちにもっとも役立つ要素を拾い上げ、選択してきたのであった。だがブルックスは、アメリカ文学上のラディカルに、伝統のない文学はその富を奪われた王国となろうと感じながらも、たえず全面的な変化を望むという問題に直面するラディカルに、力強い、効果的な言い回しを与えた。「利用可能な過去」というのは、逃げられないドグマからなる厳格な過去と過激な反乱

という根無し草の現在との一つの妥協であった。

たとえ「利用可能な過去」という考えが、現存する意見の不一致から未来の統一への移行がいかに文学で達成されるかという問題と取り組んだとしても、統合された文化の出現を含む他の問題が残った。10年代の若者たちにおいては、合衆国を構成する民族間に広がる多様性は、まず無視することはできなかった。ブルックスの未来像に関して、南欧や東欧からきた移民たちはどこに位置していたのか。この質問は一部『セヴン・アーツ』誌での実践を通して、またこの時期のブルックスのもっとも親しい同僚によって、活字を通してもっと力強く解答を与えられた。

人種的、文化的な偏見が増大する時期に、『セヴン・アーツ』誌は混合した遺産をもつスタッフを誇っていた。由緒ある家系のプロテスタントであるブルックスとボーンとが、ユダヤ人のウォルド・フランク、ポール・ローゼンフェルド、そしてジェームズ・オッペンハイムと腕を組んだ。多くのドイツ系ユダヤ人はアメリカでは快適で安定した暮らしを送るようになっていたが——フランクやローゼンフェルドはイエール大学出であった——、敵も味方も等しく、文化的な違いが残っているのは当然のこととと思っていた。ボーンとブルックスはこうした違いを歓迎し、それらの価値を強調した⁽³⁴⁾。このような関係がリベラルな知識人の間で、非差別という倫理の出現の徴候となった。その倫理の基本的な声明を発表することが、ランドルフ・ボーンに託された課題であった⁽³⁵⁾。

「トランスナショナリズム」という概念を使って、ボーンはプロテスタント・アングロサクソンの道德規範への全面的な同化だけを、移民における忠誠の印として受け入れる10年代の若者たちの、あの狭量な先住民優先の感情に対する攻撃を展開した。この均質化する見方への代案は、文化の混合から生じる積極的な価値の承認から生まれた。人種のるつぼという理想は「支配階級に適している」と非難して、ボーン

は「いわゆる外国系市民」を賞賛し、彼らの存在が生み出してきた「民族を代表する移民団からなるコスモポリタンの連邦」を歓迎した。

アメリカはすでに世界連邦のミニチュア版、太陽のもとで…もっとも異質な民族が実質的に特性を保持しながら平和に共存するという、歴史上初めてのあの希望の奇跡が実現されている大陸である。…こうしたコスモポリタニズムを受け入れて、自覚的な実りの多い目的を抱き、それを推進する任に当たるのは他ならぬ若い世代のアメリカ人である。…植民地主義はコスモポリタニズムへと成長し、その母親は一つの国家ではなく、精神に捧げられる何か人生を高めるものを持つすべての人々なのである。

ボーンにとってのキー・ワードは、それを彼はこの一節が示すように頻繁に繰り返したが、「コスモポリタニズム」、すべての民族に世界の「新たな精神的市民権」を約束する、「統合の事実」全体を暗示する言葉であった⁽³⁶⁾。

ボーンは「アメリカの国家的な理想という観念全体に取り組む」気持ちになったのは、ホレス・カレンのおかげであると認めた。そして予想されるように、ボーンのエッセイはカレンの影響を示していて、おそらくその影響はユダヤ人への特別な関心において、いちばん強いであろう⁽³⁷⁾。ジョン・ハイアムは、「カレンがもっぱらグループ・アイデンティティの場としての文化に注意力を集中していた点」にボーンが注目し、「民主主義は相違の除去でなく相違の完成と保存を伴う」という主張を含むカレンの「ロマンチックな理想主義」をボーンも共有していると指摘してきた⁽³⁸⁾。確かにボーンはカレンとともに、アメリカの未来について大いなる楽観論を抱いていたし、また『セブン・アーツ』誌のグループ全体と同様に、ボーンは文化を集団生活や国民生活の質を見きわめる試金石と見なしていた。しかしボーンはカレンと精神や目標を共にしていなかった。この相違点

から、後代の文芸知識人に対するボーン独自の、あの重要性が生まれていた。

カレンは伝統的な文化を保存し、過去を救済したいと思っていた。ボーンは未来に顔を向けて、アメリカにおける何かはつきりと新しいものの可能性を見ていた。カレンは「相違の完成と保存」を求めている。ボーンは伝統的な文化を、全ての人に入手可能だが、だれにも強制されない新しい国際化された文化に何らかの貢献ができる点で、それを評価した。自分の考えを練り上げていく中で、ボーンは反ナショナリズムに潜むある種の危険を拒否した。彼は祖国に対するいかなる政治的な忠誠心の保持も支持しなかったし、民族意識のねつ造された昂揚を推賞していないことも明らかにした。アメリカにおいて民族集団が自分たちの持ち込んできた古い文化を単に保持することに終始するのが、彼の恐れの原因だった。「アメリカはわれわれが望んでいる現代的なコスモポリタンの集合体になるのではなく、ありがたいことに国では減びてしまった後に、奇跡的にここで保持されている過去の世代のいかがわしい偏見の固まりになるという、極めて現実的な危険を冒している。」⁽³⁹⁾ボーンは偏狭な地方根性、それに伴う厳格な慣習に対する不快感を示しながら話をし、恐らくは10年代のコスモポリタニズムを鼓吹した。彼の望みは、相違を完成し保存することではなく、地方根性を打ち破り、「アメリカの若きインテリゲンチヤ」によって築かれた、「普通のアメリカ生活を豊かに高める」進歩的で多様な影響力を保持することであった⁽⁴⁰⁾。反地方根性、ますます豊かな文化という約束、そしてだれでも来る人はみな社会的に受け入れるという保障を掲げるコスモポリタニズムの理想は、抑圧的なお上品さに反抗するプロテスタントの名門出にも、移民の環境から抜けでる第二世代の知識人にも、同様に充分役だった。

理想主義、変革の切望、そしてこのヴィジョンに本来備わっている包括性に対する熱情が、ブルックスやボーンによって展開されたプラグマティズム批判を具体化する上で役だった。

1915年にブルックスは、「ここ二、三年の間、先進世界が全員一致でプラグマティズムという事業の中にすべてを賭けてきたこと」の懸念を表明した⁽⁴¹⁾。プラグマティズムはラディカルというには不十分だし、芸術的というにも不十分であった。一方において、古い形態の意識的な破壊によるのではなく、人間の創造的なエネルギーの自然な爆発による制度上の変革にあまりにも頼りすぎたことで、プラグマティズムは社会主義による資本主義の経済学的な批判に手加減を加え、また社会問題や協同行動に対する静観主義を生み出す傾向があった。また他方において、知能の力を強調し過ぎたことで、プラグマティズムは道徳、哲学、そして芸術に含まれる生活の理想的な側面を無視する危険があった。つまりプラグマティズムは、芸術的な感受性に欠けていた。こうした方法ではどれも、アメリカ文学におけるハイブラウとロウブラウの分裂を克服できなかった。プラグマティズムは政治と文学とをまとめられる統一したヴィジョンではなかった。

プラグマティズムの指導的な知識人がアメリカの第一次世界大戦への参戦を支持して多数派に加わったときに、ランドルフ・ボーンは彼の師ジョン・デューイを否認したことで、また彼が以前にとっても信奉していた考え方を拒絶したことでドラマティックなものとなったエッセイの中で、ブルックスによるプラグマティズム批判をさらに押し進めた。ボーンの「偶像たちのたそがれ」は、いたるところである特定の政治的、あるいは制度的綱領とは対立する文化の価値への関心を示した。ボーンの議論はブルックスの議論と同様に、プラグマティックなりベラリズムを機械的なものの強調や手段への没頭に密接に結び付けた。また彼らは、リベラリズムが芸術的な価値や目的への関心に対して感受性のないことを嘆いた。このような議論を繰り返して、『セヴン・アーツ』誌の批評家たちは、何十年ものあいだ多くの知識人たちに、とりわけ文芸的なラディカルに役立つ、プラグマティックなりベラリズムに対する抵抗の標準的

な方向を確立した⁽⁴²⁾。

こうした経緯にも関わらず、ブルックスとボーンとは独自の方法で自分たちの議論を形成し、後の知識人たちが決して全面的には受け入れられない言葉で、自分たちのヴィジョンを形づくった。分析というよりも勧告の色彩を持つブルックスは、夢想的な理想主義に向かって舞い上がり、芸術家を歴史の変革のエンジンとして美化する傾向があった。時にはアメリカがあたかも、偉大になり成熟を遂げるためには、ブルックスが多くのヨーロッパ文化の中で見つけたたった一つの文化的ヒーローのタイプを、「不機嫌な顔つきのアメリカのトルストイ、我慢のならないアメリカのイブセン、途方もないアメリカのニーチェ——志操堅固で孤独な一匹のサイ！」を必要としているかのように思えた⁽⁴³⁾。ブルックスとボーンには、ニューヨーク知識人のスタイル、社会的な経験、あるいは政治的確信とはどうしても一致しない抑制のない理想主義、あまりにもオープンな教訓主義の強調があった。だがトーンの違いにもかかわらず、それとなく文化が第一位であるという信念やアメリカの偉人を探求しようとするこだまが、ときどき聞こえてきたものである。

『パーティザン・レビュー』グループは、さらに意義深いやり方でこうした前任者の声を繰り返すことになった。新しい文化を求めるブルックス、ボーン、そして『セヴン・アーツ』誌全体の要求は、アメリカが世界の希望であるというある種の愛国的な確信の響きを伴っていた。この態度はしばしば、「文化的ナショナリズム」と呼ばれてきたが、この用語は注意して使われねばならない。『セヴン・アーツ』誌の批評家たちは確かに、芸術における現存するアメリカ的伝統を讃えなかった。彼らはまた、もっぱらアメリカのテーマに絞った新しい文化を創造するつもりもなかった。愛国的な、国家主義的な特徴は、主として合衆国が未来の国際的な、統合された文化を築くためのもっとも前途有望な機会を提供するという信念に示されていた。他のものたちがヨーロッパに逃れたり、

自分の部屋でアメリカの不十分な点を嘆いている間に、ブルックスやポーン、さらに彼らの盟友は、ディヴィッド・ホリンガーの言葉によれば、「彼ら自身の国民文化にヨーロッパ文明に匹敵する強さや範囲をもたらそう」と意識的に働いていた⁽⁴⁴⁾。ニューヨーク知識人は、ヨーロッパの文化と同様に、文化的伝統の豊かさと芸術的革新の新鮮さをともに維持できるように、立派な、成熟した、洗練された文化を、アメリカに生み出すという目標を共有していた。

ニューヨーク・グループの創設者たちが30年代に活発に活動するときまでに、アメリカ文化はその形を変え始めていた。アメリカ文化の中でもっとも豊かな時期の一つは1920年代に開花し、その開花期の指導者の多くは、文学のモダニズム実践者か、その使徒であった。若きアメリカの文筆家にとって、T・S・エリオットはもっとも影響力のあるモダニストとして際立っていた。その一つの理由は、エリオットが地元アメリカ出身の少年が成功した例であると思われるからであり、さらには大きな理由として、彼が決して「未熟、無器用、地方根性、あるいは陳腐さ」をさらけ出さない「完全な詩」の執筆と、はっきりと表現された鋭い批評や美学論を結び付けたからであろう⁽⁴⁵⁾。エリオットの批評は、詩人と「实际的で、行動的な人間」との鋭い対照を、詩はそれ自身の中に世界とほとんどつながりを持たない本質を含んでいるという主張を、そして伝統、秩序、過去への強調を示した——20年代の「芸術の宗教」の少なくとも一つの形式に形を与えた——⁽⁴⁶⁾。

社会的な関心事にこのように顔をそむけることを拒否して、ヴァン・ワイク・ブルックスはエリオットやモダニズムに反対する人々の最前線に身を置き、モダニストの技術的な業績と文学への熱情をますます尊敬する多くの有能な若い文筆家たちとの接触を徐々に失っていった。彼がモダニズムを攻撃した言葉や、内容が形式に命じなければならないという新しい主張で、ブルックスは自分のバランス感覚の喪失を示した。緊張関係にある要素の統合を通して二重性

を克服するように文筆家にしきりに勧める代わりに、彼は一方の側に立って厳しい論法を主張していた⁽⁴⁷⁾。20年代の後半、ブルックスは一つの挫折に直面し、それがもつて数年間ものが書けなくなってしまう。30年代に再登場したブルックスは、文学ラディカルに提供できるものをほとんど持ち合わせていなかった。

ことによると、エリオットのモダニズムと社会を意識した批評との継続的な会話がなんとか行われる可能性が最も高かったのは、しばしば復刊されたリトル・マガジン、『ダイアル』誌上であった。『ダイアル』誌は1919年に、ランドルフ・ポーンの文化ヴィジョンにならおうとする意識的な試みの中で、もう一度再刊された。この雑誌は実際に生き生きとした、折衷的な、そして印象的な作品群を出版することに成功した。さらにそれは、国際的な意識や、ヨーロッパ文化の首都から発信された、パウンド、マン、エリオットのような人によって書かれた一連の書簡で、ある意味ではコスモポリタンの見解を実際に奨励した。だが新しい編集陣に近いある人物によって提示された、他ならぬこの雑誌の自画像——『ダイアル』誌は「政治抜き『セヴン・アーツ』誌となるだろう」——の中に、その将来へのカギがあった。政治的あるいは社会的関心の欠如は、同時代の芸術の潮流がチェックも受けずに流れていくことを意味していた。1920年代に、『ダイアル』誌はアメリカにおけるモダニズムの芸術至上主義を主張する、指導的な雑誌となった。その過程で、ダイアル賞をT・S・エリオットとヴァン・ワイク・ブルックスに連続して与えたにもかかわらず、この雑誌は異なる芸術陣営を結び付ける能力を失った。1929年の廃刊のときまでに、『ダイアル』誌はエリオットと並んで、30年代のより社会的意識の高い文筆家たちが反逆しようとするものの象徴となっていた⁽⁴⁸⁾。

だが以上で、20年代に文筆家たちに開かれた可能性を語り尽くしたわけではない。ブルックスが10年代の代表として提起した、文学への関わりと社会的な関心とを結び付けようとする努

力は、モダニズムの社会への態度がどのようなものであれ、もともとモダニズムに敵意を持つものではなかった。二、三の文筆家、とりわけエドモンド・ウィルソンにおいて最も顕著に見られるように、文学は逃れようもなく社会的な文脈の中にあるという確信が、モダンなものの承認と幸せにも共存していた。1895年に生まれたウィルソンは、20年代の世代に属していた。彼はe・e・カミングスよりも一歳年下で、F・スコット・フィッツジェラルドよりも一歳年上であった。彼の世代とともに、ウィルソンは「お上品ぶった」生活の不毛さをひどく嫌い、ピューリタニズムを攻撃したが、その時期の過激な行動の多くは避け、いかなる党派にも属さなかった。

ウィルソンはある伝記作者が述べたように、「青年期が過大に評価され過ぎていて、放棄してしまった若者」の様子で、文筆家兼編集者になるという真剣な仕事に取り組んだ⁽⁴⁹⁾。もっと無軌道な同時代人とは違って、ウィルソンは長い間、年配者たちの文学的関心を単に投げ捨てて、無視するわけにはいかなかった。『調子はずれの遭遇』の中で、ウィルソンは10年代の思想に、彼が20年代初期の論争に欠けていると気づいていた点についての、バランスのとれた、正確な考察を加えようとした。ブルックスの現在の姿勢にはおおいに批判的ではあったが、ウィルソンは寛大にも彼の初期の寄稿の重要性は認めた⁽⁵⁰⁾。事実ブルックスは、ウィルソン自身を夢中にさせたたくさんの争点を明らかにしていた。ブルックスと同じように、ウィルソンはアメリカ的な環境の中での文化の諸問題に繰り返し本気で取り組んだし、またブルックスと同様に、社会の対立する力を統合できる方法を求めている。ウィルソンはハイブラウとロウブラウの二重性という概念を受け入れて、洗練された人々の理想の必要性和一般大衆の活力やエネルギーの必要性和を調和させようと苦闘した。彼自身はまた、東部と西部との緊張関係、金持ちと貧乏人との緊張関係、アングロサクソンと移民との緊張関係にも関心を持っ

ていた。社会に対する教養人の義務と格闘しながら、ウィルソンは彼よりも以前にブルックスが結論を下したように、統一された見方が欲しくてたまらない国では、文芸批評は社会批評にならざるをえないとの結論を下した⁽⁵¹⁾。

20年代の後半に、ウィルソンは依然として社会を意識している良質の文学を求める主要な代弁者になった。『ニュー・リパブリック』誌の編集席から、ウィルソンはとりわけ批評における営利主義、狹量さ、ずさんな基準を猛烈に攻撃した。もしウィルソン自身がまさに「文学者」のタイプを代表するようにならなかったとしたら、彼の攻撃はもっと簡単に片づけることもできたであろう⁽⁵²⁾。1920年代にウィルソンは、ブルックスと関連する文学の社会的関心とエリオットによって説かれた美への集中の両方を奨励したが、どちらか一方に偏することはなかった。彼はあらゆる種類の雑誌に書き、他の雑誌も編集した。彼は自分自身の実験劇がプロヴィンスタウン劇団によって上演されるのを見た。加えて、彼は『私はヒナギクのことを考えた』という小説を完成し、アメリカ文化を悩ませている選択と問題をフィクションで再現した⁽⁵³⁾。自分の仕事の原則をもう一つの領域にも持ち込んで、ウィルソンは30年代が始まると、最初の完全な批評の本、円熟した大家にふさわしい『アクセルの城』を出版した。

究極的には意見を異にするけれども、1870年から1930年までの文学の象徴主義運動に関するこの完全で公平な見方において、ウィルソンは同じ時期に、エリオットから吹き込まれて支持者を集めた形式主義とは対立する影響力のある批評モデルを提供した。文脈を入念に調べることから始めて、ウィルソンは象徴主義は生物学の機械論的な考え方や文学の自然主義への芸術的な反応であると論じた。象徴主義はロマンティズムに、つまり「同じ潮の二番目の満潮」に、「自然の機械論的な見方や社会的な人間観から離れた振り子の二番目の振幅」に極めて近かった⁽⁵⁴⁾。基礎が確立されると、ウィルソンは象徴主義の六人の主要な文筆家を検討し

始めた。

これら六人の中でも、T・S・エリオットは象徴的にも、その本の中でもっとも重要な人物であった⁽⁵⁵⁾。ウィルソンの同時代人で、またアメリカ文学での指導力を競い合うライバルでもあるエリオットは、その後、ラディカルな批評家たちに挑戦したようにウィルソンにも挑戦し、多くのものに受け入れ難い文学的、また社会的な見解を論じた。ウィルソンはこのバランスの必要な行為をかなりの腕前でこなし、詩人また批評家としてのエリオットに十分な賞賛を与えた⁽⁵⁶⁾。だがウィルソンはこの本の中で、もっと大きなねらいを持っていた。つまり文筆家と社会との必然的なかかわりや、狭い芸術至上主義の枯渇を示すことであった⁽⁵⁷⁾。この尺度で測れば、エリオットはそれほど抗し難い人物でもなかった。ウィルソンは書きながら、文脈批評という自分自身のスタイルを主張して、エリオットがその作品を彩るある特定の社会やある特定の伝統の産物であることを強調した。「性的な経験から禁欲的に後込みすること」や、その代わりに「宗教的な感情を求めて懸命に努力すること——本当の信仰よりもむしろ、信じるのがよいことなのだろうという信念」を含めて、エリオットは「芸術家に転じたピューリタン特有の葛藤」を示した⁽⁵⁸⁾。言い換えれば、エリオットはブルックスの述べたアメリカ文化の罫にかかり、ハイブラウの衰弱にかかっていた。

文化的なものとの社会的なものとの必然的な関係を強調し、またブルックスが信じたように批評におけるその二つの統合の必要性を信じるウィルソンは、エリオットが創作活動をする際の前提をぶっさらばうに糾弾した。詩は「実際の人間の用途」とは無関係な「何らかの種類の純粋で、珍しい審美的な本質」であるとするとエリオットの見方は、ウィルソンには「全く非歴史的であり——審美的な価値を他のすべての価値から独立させようとする不可能な試み」に思われた。さらにエリオットの近年の仕事は、「反動的な観点」を暴露していた。エリオット

は過去に顔を向け、現在や未来には向けていなかった。彼は芸術を人生から切り離し、批評を狭い見当違いのところに導いていた。たとえそれほど偉大な詩人であろうとも、エリオットはアメリカ文化を築き、活性化し、そして統合するモデルではなかった⁽⁵⁹⁾。

ウィルソンの象徴主義に対する全体としての結論は、彼のエリオット分析から直接に出てきた。この運動はすでに終わっていた。それというのも、この運動が頂点を極め、新しい可能性を欠いていたからである。だがこの死にあたり、新しい生命の生まれる見込みがあった。ウィルソンはブルックスやボーンのような人にふさわしい将来の統合や文化の進歩のイメージを提示した。

われわれの客観、主観という概念は、疑いもなく偽りの二重性に基づいていた…。古典主義とロマンティズム、自然主義と象徴主義は、それゆえ実際には偽りの二者択一である。それでわれわれは、まだどんな人も知らないほど豊かで、微妙で、複雑で完全な、人間生活とその宇宙のヴィジョンをわれわれに提供してくれる自然主義と象徴主義の結合を、眼のあたりにするかもしれない。

新しい統一は文学を超えても可能であった。何か「新しいラディカルな単純化」が、ヴァレリーによって予言された「科学と芸術の無限の専門化や分岐」を完全に追放するかもしれない。「そして科学と芸術が経験をますます深く研究し、ますます広い領域を獲得するにつれ、…それらがわれわれの知覚を使って、芸術と科学を一つにする考え方や感じ方に至らないと、誰が言えるであろうか？」⁽⁶⁰⁾

ウィルソンにおけるこうした希望は、『セヴン・アーツ』誌のラディカルな文芸的伝統に属していたが、それはまたさらにずっと差し迫った事情も有していた。『アクセルの城』の執筆までに、合衆国は大恐慌に突入していたし、文筆家は「ますますロシアを、すなわち中

心をなす社会的・政治的理想主義がエンジニアばかりか芸術家をも活用し、靈感を与えることが可能となってきた国を意識するようになって」いた⁽⁶¹⁾。科学と芸術を統一する哲学としてのマルクス主義の可能性は、30年代にかなり多くの文学にかかわる人々の目をくらませたものであった。そしてあるものにとり、ウィルソンの批評が暗示しているように、マルクス主義のヴィジョンの力は、部分的には10年代に芽生えた批判的な見方の前提と希望を少なくとも簡潔に補強する能力に由来していた。

ニューヨーク知識人はエドマンド・ウィルソンに、そして意識的にしろ、無意識的にしろ、ウィルソンを超えてブルックスやポーンに、文芸批評家の適切な守備範囲のイメージを、関心事の一覧表を、そしてアメリカ文化の完全な成長を妨げる問題認識を期待した。エリオットは彼がウィリアム・フィリップスに対してそうであったように、「現代の感性、とくに韻文における感性を導入し、そして当時一般に受け入れられていたよりもさらにきちんとした、正確な、正式の研究方法という考え方」を導入した張本人であるかもしれない。だがウィルソンは、「過去と現在を放浪し、新しい文筆家を評価し、また彼らをわれわれの新しい歴史的経験と結び付けながら、文学の社会的・人間的な側面を開き、そして同時代の嗜好の手本を定めた」幅広さとスタイルを持つモデルであった。ウィルソンは「文学の全体性」のモデルであった⁽⁶²⁾。

ライオネル・トリリングにとって、ウィルソンは文学的活力やグレニッチ・ヴィレッジの伝統の生きている特別な象徴であった。1929年にトリリングは、「グレニッチ・ヴィレッジでアパートを借りて、知的生活と連帯する合図を送った。」「ヴィレッジの現在の威厳を確認し、アメリカ生活でヴィレッジの表すものが必ずしも完全には歴史の問題ではないことを示すために、エドマンド・ウィルソンはちょうど通りの向こう側に住んでいた…。私はいつも彼が、晩に何時間も机に向かう姿に注目したものであった。」トリリングにとって、ウィルソンは「自分

本来の仕事をしており、若かったけれども文学生活の理念を提案し、実現しているようであった。』⁽⁶³⁾

20年代の他のどんな人物よりも、ウィルソンは10年代からの批評の遺産とモダニストの洞察力とを結び付けた。西欧のもっとも進んだ文学を扱いたいと願いながらも、その時代の社会環境を無視できずに世の中に出てきたニューヨーク知識人は、ウィルソンの中に、モダニズムと同時代の社会の両方に取り組み批評が可能である一つの証を見いだした。これらの若い批評家には、他にも基準や関心事の生まれてきた源があり、ある源は彼らと同時代の多様な学派の中にあり、別の源は西欧文学のより深い資源の中にあった。しかし文学へ向かう人々にとって、いかなる影響も10年代にブルックスやポーンから生まれ、20年代の後半までにエドマンド・ウィルソンにおいてもっとも明確に例証された、文化と政治を結び付ける批評の伝統より重要ではなかった。

移民の都市とグレニッチ・ヴィレッジのある都市はまた、——偶然の一致ではないが——ラディカルな政治にもっとも好意的なアメリカの都市でもあった。1930年代のニューヨークは、それがどんな形態を取っても、マルクス主義に対して受容的態度を示した。そしてニューヨークは、共産党において制度化された種類のマルクス主義と、その何人かの誹謗者や競争相手との間の闘争に対して、格別のおおらかさを示した。ライオネル・アベルはかつて、「興奮と不況の中であって、この街は起き上がり、ロシアに出かけていった」と述べた。

政治的にはニューヨーク市は当時、ソ連邦の最も興味深い一部となった。ニューヨークが、スターリンとトロッキーの闘争を公に表明できるあの国の一部になったからだ。そして実際にそうであった！ おおいに！…他のいかなる大都市もニューヨークに続くことはなかった。ロンドンも、パリも。しかも、これらは世界の「進歩した」都市であった⁽⁶⁴⁾。

ニューヨークの華々しい実績とアメリカの都市がロンドンやパリを越えたという事実に対するアベルの誇りは明らかであった。ラディカリズムをめぐる論争は、ニューヨーク知識人の多数と同様に、アベルにとっても、文化表現の一形式であった。30年代の闘争に彼らが係わったことから、彼ら特有の都会的プライドを満足させ、彼らの増大する——控えめなものではあるが——ナショナルな自尊心を強化する、知的成熟と文化的経験の意識が出てきた。ラディカリズムはニューヨーク知識人の発展段階で、明らかに中心的な位置を獲得することができた。なぜならばラディカリズムは一時期、第二世代のユダヤ人としての社会的遺産と進んだ文学への彼らのかかわりの双方を含んでいるように思われたからであった。

ラディカルな思想は東欧にある多くのユダヤ人居住区に及んでいたが、ここニューヨークでも、ユダヤ人の中で独特な理論と理論家の集中を生み出した。ラディカルたちに影響を及ぼしたのは、彼らの数よりもむしろ彼らの思想によって促進された世俗的な知識や直接行動主義であった。「社会主義者、アナキスト、そしてさまざまな色合いの共産主義者が、相変わらず移民たちの中では少数派であるのに、新しいユダヤ人社会での政治的なトーンを決める上で多くの役割を果たした。ラディカルたちはイディッシュ語の定期刊行物を編集し、演壇を支配し、そして最初のユダヤ人が支配する政治行動グループを組織した。」⁽⁶⁵⁾ 共産党が第一次世界大戦後、アメリカに出現したときに、ユダヤ人はそのメンバーの中で抜きんでいた。ネイサン・グレイザーは、「西欧世界の他のほとんどすべての共産党と区別されるアメリカ共産黨員の特徴の一つは、そのメンバーの大きな割合がユダヤ系であることだ」とコメントを述べたことがある⁽⁶⁶⁾。ユダヤ人社会で成長する若い知識人にとって、ラディカリズムのある程度の知識は避け難いものであった。幾分お気に入りのおじさん、あるいは道の向かいに住む年上の少年少女、あるいは戦闘的な労働者が、社会主義

の思想を受容性に富む子供に紹介するかも知れなかった。あるいは恐らく社会主義の勉強は家で、自らが非宗教主義やラディカリズムに飛躍を遂げたことのある両親から学ぶかもしれない。知的志向のある若者たちが成長するにつれ、ユダヤ人社会におけるメディアや世俗的な制度でのラディカルたちの存在は明らかに抜きんでたものになった。学校や大学は多種多様な党派や分派のラディカルな直接行動主義が活躍するもう一つの舞台を提供した。ラディカリズムが活用できたために、より多くの未来の知識人が、まだ若すぎて自分自身で道を見つけれないときに、その旗のもとに結集した。ダニエル・ベルは13歳で社会主義グループに加わり、アーヴィング・ハウも14歳で加わった⁽⁶⁷⁾。ラディカリズムを信奉することは、多くの若いユダヤ人にとってなら重大な決定ではなく、自然の成り行きであった。

若きユダヤ知識人が出会った政治的なラディカリズムは、大半がヨーロッパからの輸入品であった。それが合衆国や他のすべての資本主義国の支配的な社会的経済的形態を明白に攻撃する時に、アメリカ生まれのラディカルの伝統も暗黙のうちに片づけてしまった。こうなった理由の一つは、都会のユダヤ人が単にこうした伝統とほとんど接触を持っていなかったことによるのかもしれない。だがユダヤ知識人がアメリカ生まれのラディカリズムを吟味したときでさえ、彼らの原点は田舎にあること、洗練されていないイデオロギー、そして限定された同胞愛の概念——ジョン・ハイアムの言葉を借りれば、決して「人種や国籍という障壁に反対する強力なイデオロギー攻撃を仕掛けたことがなかった」ラディカリズム——しかなかった⁽⁶⁸⁾。

若いニューヨーク知識人の興味を最もかき立てた、より広範なアメリカ文化の中のラディカリズムは、彼らのもとに文学的知的遺産としてやって来た。過ぎ去った19世紀の後半以来、文学に携わる人たちは、もっと洗練されたアメリカ文化のために働くと同時に、アメリカ産業社会の野卑で、人間性を失わせる側面の攻撃に関

与し続けてきた。アメリカ生活における営利主義の腐敗への攻撃を組み立てる中で、ヴァン・ワイク・ブルックスはこうした傾向に新鮮な意見を述べていた。20年代の多くの文筆家は、政治的な事柄には関心がないと声高に宣言していた。だがモダニズムは、一つには文化におけるラディカリズムの 아우ラが原因となって、彼らに訴えていた。さらにこの10年間の知識人の生活の特徴づけるものは、何と云っても文芸知識人による商業文化の攻撃であった。あるものにとって、30年代のマルクス主義への移行は、明らかにこのパターンの延長以外のなものでもないだろう⁽⁶⁹⁾。

不況になると、若いニューヨークの文筆家たちは、彼らの社会経験や文学遺産の双方から生まれたラディカリズムを全面的に受け入れたり、それにかかりやすい状態で、この危機に直面した。個人レベルのラディカリズムへの転向は、自覚した決定の瞬間によるというよりも、一般の意見の流れに左右されて徐々に起こった⁽⁷⁰⁾。だが若い知識人がマルクス主義に関与するときでさえ、彼は自分の直面している課題のすべてに答えていたわけではなかった。初恋の相手が文学であるものにとって、マルクス主義は何を意味するのか？どのようにして政治と文化は調和するのか？マルクス主義が特殊には文学に対して、また一般にはアメリカ文化に対してなしうることは、いったい何か？ラディカリズムに接近する際に、またそのような問いに想いをめぐらし始めた時に、野心を抱く文筆家や批評家が視線を向けたモデルは一つにとどまらない。ラディカルを自称するものの隊列内部での主要な意見の不一致が、共産党の正統派路線を支持するものたちと、さまざまな手段で自分たちの独立を主張するものたちとの間で目立ち始めてきた。30年代に左翼に移行した一人一人の知識人にとって、この意見の不一致は最後には選択の必要を迫るものであった。

文学における正統派共産党の見解を最もよく代表するようになった男は、ほぼ間違いなくマ

イク・ゴールドであった。ゴールドは10年代から革命と革命的な著作とを夢みてきていた。そしてかなり非政治的になった20年代には、ダニエル・アロンが述べたように、「他の文筆家は誰も、彼ほど意識的にボヘミアニズムや国籍離脱者の無関心と戦ったものはいなかった」のである⁽⁷¹⁾。1926年の『ニュー・マッシズ』誌の創設者であるゴールドは、組織化された政治に対してラディカルな文筆家が取るべき正しい態度をめぐる、この雑誌の初期の論争において、大きな役割を演じた。断固とした見込みもなく、また思いもかけない結論もすぐに受け入れられる疑わしげなラディカリズムを主張していたジョン・ドス・パソスを初めとする人々に対抗して、ゴールドは「モスクワと革命」が若い文筆家に指導精神を与えるべきだと論じた。この雑誌の「リベラルたち」が、ゴールドの考えは人間の複雑さを無視した、単純化した善対悪という世界観を表していると言ったとき、ゴールドは彼らは過度に理想主義的であり、知的な組織化を欠いていると応じた⁽⁷²⁾。

1928年の『ニュー・マッシズ』誌の再編成により、ゴールドは有力な編集者になり、自分自身のイメージに合わせて雑誌を作り始めた。「プロレタリアの天才が出現した場合に、それが[この雑誌が]天才に対する準備ができていよう」ように、ゴールドは「アメリカの働く男や女、そして子供たちに『ニュー・マッシズ』誌の執筆の大部分を担当し」、「労働者芸術の生の題材」を提示してほしいと思った⁽⁷³⁾。ゴールドには、知識人はどういうわけか相変わらず老衰しているが、労働者はいつでも雄々しく、男性的で、そしてヒロイックであるように思われた。アメリカの知識人はこうした労働者賛美を受け入れよと要求して、ゴールドやその同盟者たちは基準をめぐって真面目に対決しろと脅かした。リチャード・ベルズが述べたように、「とどのつまり知識人は、自分の商売道具そのものを捨て、批判的に考えることをやめて、『新しい人間』になることを求められていた。」ゴールドはブルジョア文筆家の個人主義は「た

だ小さなカフェの仲間や取るに足りない変人」を生むだけだが、偉大な芸術家や思想家は「その時代の世界のヴィジョンを共有する」と論じて、集産主義的思考は文化の息を詰まらせるものになるという芸術家の恐怖に片をつけた⁽⁷⁴⁾。良質な文筆家でゴールドほど極端に走るものはほとんどおらず、また多くのラディカルたちは現代文学を完全に捨て去ったり、あるいは排他的な文学の台座に労働者を就けたりすることを拒否した。

ゴールドはしばらくの間、狭義のプロレタリア文学を擁護し続けることになった。だが彼は、文学、文化、そして知性は革命組織の政治的必要性に奉仕すべきだという信念に立って、ソ連邦の政策変更の命ずるままに、喜んで自分の文化的構えを変えるつもりだった。ゴールドの見方からすれば、共産主義は厳格な規制を文筆家に課すものではなくて、実際には「創造的な自己規制」を勧めるものであった。ラディカルな文筆家は厳しい現実と徹底した革命の必要性を認識し、自分以外のリーダーシップを求めねばならない。「革命は大衆を理解するという強力な天賦の才能に恵まれた技師たちによって運営されるべき事象、感情に左右されない重大な現実の事象である。」⁽⁷⁵⁾ そしてゴールドが自分は全部分かっていると感じていたように、大衆は原理の純粹さなど無視して、勝利することにあこがれた。(彼がリベラリズムの特徴としてあげる) 妥協、抑制、用心、微妙さに対しては、ゴールドは軽蔑以外なものをも表明しなかった。

共産党の文学陣営でのもう一つの強力な発言は、グランヴィル・ヒックスの発言で、1934年の初め、『ニュー・マッシュズ』誌が週刊誌として発刊され始めたときに、彼は文芸担当の編集者になった。ヒックスのハーヴァードで受けた教育や大学の英語教師としての初期の経歴は、ゴールドのみすばらしい生い立ちや労働者階級の攻撃的な態度と著しい対照をなしていた。そしてゴールドが「体系的ではないが情熱的」であるのに対して、ヒックスは「もっと訓練され

た、おそらくは訓練されすぎた知性」を有していた⁽⁷⁶⁾。『ニュー・マッシュズ』誌に載った1933年2月の最初の重要な論文で、ヒックスは文学作品は階級闘争を扱い、「強烈」に現在の経験を扱い、そして「プロレタリアートの前衛」の見解を扱うべきだと要求する、マルクス主義批評の規則を確立しようとした。こうしたガイドラインが「単に完璧なマルクス主義的小説を認知する基準」を提供するだけでなく、「すべての文学の評価方法」をも提供するであろうと彼は信じた⁽⁷⁷⁾。「完璧な」小説という考えや、彼がそれを認知する際の基準の独断には、ヒックス特有の限界がうかがわれる。

ニュートン・アーヴィンと共産党運動の関係は、ヒックスやゴールドのいずれよりも緻密で、有能な批評家が展開しうる立場の複雑さを例証した。アーヴィンはゴールド流のプロレタリア至上主義を誉めたたえる傾向は示さなかった。1930年に彼は、『ニュー・マッシュズ』誌に関して私が気に入らない点は、理想化されたプロレタリア至上主義の見せかけ、ハードボイルドの弦を単調にかき鳴らす調子、一つを除く他のレベルの考え方への敵意、調整された著作や批評に対する軽蔑、討論の回避である」と不平を述べていた⁽⁷⁸⁾。ヒックスの後年の回想によれば、共産党の文化パターンに夢中にならなかったことが、ヒックス自身の初期の態度やロバート・ゴーム・デイヴィス（30年代のラディカルの時代には、オベド・ブルックスという名前を使っていた）の態度の特徴であった。だがこれらの知識人の留保が如何なるものであれ、彼らは共産党と密接な同盟を組んでいた。ヒックスやデイヴィスは、共産党の指導者が「…われわれにとって真の闘争、この恐るべき絶望的な闘争」の中心で戦っていること、また彼らに関わりのある思想的問題は、「…舞台の縁に沿ったもっとも厚いほこりの中から考えねばならない」というアーヴィンの個人的な判断に大部分同意した⁽⁷⁹⁾。

党のリーダーシップに対するこのような態度、すなわち知識人の伝統的な関心事に勝って

社会的変革を第一に認めたことは、アーヴィンのような明敏で感受性の強い人たちが、1939年の瓦解まで——党の正統性の不完全さや単純化を批判しながらも——、如何にして自分たちの異論をわきに置き、共産党のもとに留まりえたかの説明におおいに役立つ。たとえどれほど彼ら自身が知的な価値を大切に、たとえどれほど彼らが考える人間として、自分たちを実際の労働者から切り離していたとしても、ヒックス、アーヴィン、そしてディヴィスのような文筆家は、共産党は人を鑄型にはめるのだが、知識人が歴史上では下位の人物であると信じていた。知的生活や文化が基本的に重要だという信念を放棄するにあたり、彼らは自分たちの批判的機能の誠実さを維持するために必要な立場の多くも放棄してしまった。

ラディカルの分水嶺のもう一方の側では、文学や批評を共産党の組織的な束縛から自由に、またソ連邦の教義に基づく非難から自由にせよと要求する勢力では、エドマンド・ウィルソンが価値ある擁護者であることに気づいた。ゴールドが党の正統性を体現していたのと同じほど、ウィルソンは党派に左右されないラディカリズムの考えに意味づけをした。それはウィルソンが、アメリカの状況の恐ろしさを見逃していたからではなかった。彼が30年代初期に、マルクスを信奉できなかったからでもなかった。彼の将来への希望が欠けていたからではなかった。むしろ逆に、ウィルソンが基準の保持を、知識人の分析的な役割を、また知識人を共産党から切り離すアメリカ的なラディカリズムの必要性を主張したからであった。ウィルソンの場合には、政治が基本的な文学的、知的な価値を踏みにじることはなかった。

1930年にハーバート・クローリーの死により、『ニュー・リパブリック』誌が指揮を取る編集者を失って以降、この雑誌はコラムの中で、知識人の取るべき正しい進路について編集陣の論争を載せた。その時、ウィルソンはリベラルな同時代人に、マルクス主義を考慮するように促して有名になった。ウィルソンはジョー

ジ・ソウルのリベラリズムに対抗して、ラディカルな考え方を支持した。「進歩主義者へのアピール」の中で、ウィルソンは資本主義体制が壊れてしまったという考えが基礎だと主張した。アメリカ人は志気が低く、しかも金儲け社会を続ける価値には納得していないように、ウィルソンには思われた。リベラルと進歩主義者は「資本主義に賭けて」いたことに気づいて、ウィルソンは社会主義の公然とした支持を要求し、「アメリカ人はラディカルな社会的実験を支持して、初めて自分たちの理想主義や組織化の才能を進んで断念する」と願った。ウィルソンはロシアの実例がアメリカにとって喜ばしい挑戦になるのも無理はないと主張するまでになった。「結局のところ、共産党の目論見にはアメリカ人が賛美するほとんどすべての特質——リバティ・ローン運動（5年間で何か大きなことをうまくやり遂げるという考え方）のように、熱狂的な後押しの雰囲気の中で、共通の行為により達成される、非常に困難な芸当ではあるが、理想と結合した効率と節約の極致——が備わっている」⁽⁸⁰⁾

ウィルソンがロシアを誉めたたえた言葉には、非常に重要な意味があった。ウィルソンは合衆国がロシアのまねをしると唱えていたのではなく、アメリカは独自の社会主義社会を創り出すために、ソ連邦の達成からインスピレーションを受けろと唱えていたのである⁽⁸¹⁾。彼のエッセイはさらに続けて、アメリカの進歩主義者は「共産党員から共産主義を奪い取り、それを曖昧さや留保なしに受け入れる」ことを力説していた。1930年代が進むにつれて、ウィルソンの現存する共産党の戦術に対する不快感はますます明らかになった。彼はとくに、党の知識人の「利用」に憤慨し、そして1932年までには彼は、「共産党の殉教者を製造する習慣」について辛辣な批評を漏らし、知識人はロシアに過度に感銘を受けすぎているとほのめかしていた⁽⁸²⁾。こうした幻滅の始まりは、ウィルソンがまず知識人であり、社会的な関心を持った文人であり、革命家や政治家ではないという事実

を反映していた。彼は単に共産主義が再加工されて、「アメリカ製」というスタンプが押されることを望んだのではなく、階級の力の急激な台頭以上に、思想の動きを心に描いていた。

政治的なイデオロギーを通して、知識人と文筆家の世界の裂け目を修復できるあのヴィジョンの統一を探し求めた点において、ウィルソンはマイク・ゴールドの社会的な変革を称えるための文学や文化の利用よりも、ヴァン・ワイク・ブルックスの文化革命の枠組みとしての社会主義の利用の方はずっと近かった。ウィルソンはもつれ合った、ありとあらゆる同盟関係を擁する組織政党に、自ら近づきすぎることとは決してしなかった。だが他のものたちにとって、ラディカルな文学への献身と共産党への関与は、両立しえないペアの組み合わせではなく、30年代初期には、自然な結びつきであるように思われた。もし新しい社会が出現しつつあり、またもしマルクス主義が統合するヴィジョンを提供するならば、なぜ若き文筆家たちはウィルソンの批判的な見方、ゴールドの『ニュー・マッシズ』誌の闘争性、そして、いやそれどころか、エリオットやモダニストたちの洗練された文学的な実験を、一つに結合することができなかつたのか？文学の価値と政治の要求は、適切なラディカルな認識と和解させることができたはずだ。こうした信念を持って、ニューヨーク知識人の創立世代の多くは、30年代に自分たちの道を切り開き始めた。

(続く)

第一章の註

- (1) Alfred Kazin, "The Jews as Modern Writer," in *The Ghetto and Beyond: Essays on Jewish Life in America*, ed. Peter I. Rose (New York, 1969), 423.
- (2) Irving Howe, *World of Our Fathers* (New York, 1976), 115-116.
- (3) John Higham, "Social Discrimination Against Jews, 1830-1930," *Send These to Me: Jews and Other Immigrants in Urban America* (New York, 1975), 167.
- (4) David A. Hollinger, *Morris R. Cohen and the Scientific Ideal* (Cambridge, Mass., 1975), 19.
- (5) Joseph Freeman, *An American Testament: A Narrative of Rebels and Romantics* (New York, 1936), 21-22; Norman Podhoretz, *Making It* (New York, 1967), especially chap. 1, "The Brutal Bargain," 3-19. Joseph Freemanは厳密に言えば、「ニューヨーク知識人」と見なされるべきではない。そうは言っても、様々な資料で描かれている共通のパターンを反映する彼の初期の経験に伴う典型的な性質を割り引く必要はない。Freemanの物語は、Daniel Aaronの *Writers on the Left* (New York, 1961) の中で、詳細に、また恐らくは非常に共感的に論じられている。
- (6) 例えば、Irving Howe, "A Memoir of the Thirties," *Steady Work: Essays in the Politics of Democratic Radicalism, 1953-1966* (New York, 1966), 354-355 を参照。この作品も含めて、Howeの初期の回想作品の多くは、*A Margin of Hope: An Intellectual Autobiography* (New York, 1982) の中に収録された。二重生活の意識については、Alfred Kazin, *Starting Out in the Thirties* (Boston, 1965), 48 も参照。
- (7) Howe, *World of Our Fathers*, 251.
- (8) Alfred Kazin, "Under Forty: A Symposium on American Literature and the Younger Generation of American Jews," *Contemporary Jewish Record*, 7 (Feb. 1944), 11.
- (9) ユダヤ人はプロテスタントやカトリック教徒の安息日には仕事をせずにはぶらぶらして、ユダヤ教の安息日には働くことを要求された。公立学校はユダヤ人の子どもたちに、主の祈りなどをしつこく朗読させて、キリスト教への信仰を強要した。禁酒法のようなプロテスタント道徳に基づく運動が、ワインの儀式での使用を含めた宗教的な慣習を脅かした。例えば、Daniel J. Elazar, "American Political Theory and the Political Notions of American Jews: Convergences and Contradictions," in *The Ghetto and Beyond*, ed. Rose, 213-214 を参照。文化と文化の間に起こる一般的な摩擦の例が足りないと言うのであれば、街の不良少年たちの間に起こった争いがあった——Joseph Freemanの住んでいた地区では、争いはユダヤ人とアイルランド人（この場合は、どんな民族であれ非ユダヤ人を意味している）の間の争いであり、William Phillipsの住んでいた地区では、ユダヤ人対イタリア人の争いであった——。さらに学校では、教師や他の生徒から、露骨な反ユダヤ主義的発言も行なわれていた。Freemanは、かつてフランス語の教師がクラスで彼に向かって叫んだ言葉を報告している。「何のために大学に行きたいのだ。アメリカの大学はアメリカ人のためであるべきだ！ お前はヨーロッパ人でもない。お

- 前は東洋人——ユダヤ人だ！」Freeman, *American Testament*, 18-19, 42; William Phillips, *A Partisan View: Five Decades of the Literary Life* (New York, 1983), 21 を参照
- (10) Higham, "Social Discrimination Against Jews," 161.
- (11) Alan Lelchuk, "Philip Rahv: The Last Years," in *Images and Ideas in American Culture: The Functions of Criticism: Essays in Memory of Philip Rahv*, ed. Arthur Edelstein (Hanover, N.H., 1979), 204. ユダヤ人の若者が、西洋的な考えに近づいたときの熱意を示す他の例としては, Hollinger, *Morris R. Cohen*, 25 を参照
- (12) Kazin, "The Jew as Modern Writer," 429.
- (13) Podhoretz, *Making It*, 32-33.
- (14) Leon Wieseltier, "Only in America," *New York Review of Books* (July 15, 1976), 25.
- (15) Thorstein Veblen, "The Intellectual Pre-Eminence of Jews in Modern Europe," *Political Science Quarterly*, 34 (March 1919), reprinted in *Contemporary Jewish Record*, 7 (1944), 565, 567.
- (16) Robert E. Park, "Human Migration and the Marginal Man," *American Journal of Sociology*, 33 (1928), 891-892. Allen Guttman, *The Jewish Writer in America: Assimilation and the Crisis of Identity* (New York, 1971), 137 の中で引用されている。
- (17) Irving Howe, *Commentary*, 2 (1946), 361-367. *The Jewish Writer in America* の中で, Allen Guttman は次のように宣言した。「キリスト教国にいるあらゆるユダヤ人は、多くのキリスト教徒が決して知らないことを知っている——すなわち、人生の究極の問題に対しては、一つ以上の回答があること。ユダヤ系の知識人はさらに多くのことを知っている。彼は、少なくとも二つの回答があり、そのいずれもが役には立たないことを知っている」(136-137)。
- (18) アメリカにおけるユダヤ人のアイデンティティの問題に関する高度な議論は, Harold Rosenberg, "Jewish Identity in a Free Society," *Discovering the Present: Three Decades in Art, Culture, and Politics* (Chicago, 1973), 259-269 の中で見出されるかもしれない。
- (19) Irving Howe, "New York and the National Culture," *Partisan Review*, 44 (1977), 175-176; Kazin, "The Jew as Modern Writer," 426.
- (20) Howe, "A Memoir of the Thirties," 352-353.
- (21) Lionel Abel, "New York City: A Remembrance," *Dissent*, 8 (1961), 251. Irving Howe もまた, 若いラディカルや知識人はしばしば, 「ここでのみ, ニューヨークでのみ, とにかく人は生きることには我慢ができるのだ」と感じていたと述べている。"A Memoir of the Thirties," 351 を参照。
- (22) Podhoretz, *Making It*, 3.
- (23) Abel, "New York City," 251-252.
- (24) Alfred Kazin, *On Native Grounds: An Interpretation of Modern American Prose Literature* (New York, 1942), 166. 以下の文章にある引用は, 168ページで見つかるだろう。
- (25) 10年代の若者の知識人は, 進歩党運動によって投げられた単なるきらめきとして, 時に取り扱われてきた。Henry Mayや他の人々が以前に強く主張してきたように, 反乱は多くの支配的な政治的価値に対する反対という形で具体化した。Paul F. Bourkeは "The Social Critics and the End of American Innocence: 1907-1921," *Journal of American Studies*, 3 (1969), 57-61 で, 政治の部門でこのような知識人を取り扱うことは不適切だと論じている。Henry F. Mayの *The End of American Innocence: A Study of the First Years of Our Own Time, 1912-1917* (New York, 1959) は, この時期における知識人生活の基準となる報告である。Arthur Frank Wertheim, *The New York Little Renaissance: Iconoclasm, Modernism, and Nationalism in American Culture, 1908-1917* (New York, 1976) も有用で, きちんとした最近の関係書目を提供してくれる。"The Rebels of Greenwich Village," *Perspectives in American History*, 8 (1978), 335-377の中で, Kenneth S. Lynnは誤りを正し, いささか暴露的でもあることを意図した説明を行なっている。
- (26) Harold Rosenberg, "The Education of John Reed," *Partisan Review*, 3 (June 1936), 28. Meyer Schapiroは, この時代のアッシュカン派の画家について, 同じような主張をしている。"Rebellion in Art," in *America in Crisis*, ed. Daniel Aaron (New York, 1952), 241 を参照。最近の報告としては, Leslie Fishbein, *Rebels in Bohemia: The Radicals of "The Masses," 1911-1917* (Chapel Hill, N.C., 1982) を参照。
- (27) Daniel Aaron の10年代の若者の別種のグループ分けの議論については, *Writers on the Left*, 23-29 を参照。
- (28) Claire Sprague, ed., "Introduction," *Van Wyck Brooks: The Early Years: A Selection from His Works, 1908-1921* (New York, 1968), xx-xxi. 他の文献では, 異なる名前が含まれていたり, このうちの何名かが拒否されている。Aaron は *Writers on the Left* の中で, Lewis Mumford を Brooks と Bourne によって導かれたグループの親しい仲間を含み (26), 一方で Sherwood Anderson を「分類しがたい」と分けている (29)。
- (29) すでに引用した文献に加えて, Brooks に関するこの議論は, William Wasserstrom, *The Legacy*

- of *Van Wyck Brooks: A Study of Maladies and Motives* (Carbondale, Ill., 1971), Paul Francis Bourke, "Culture and the Status of Politics, 1907-1917: Studies in the Social Criticism of Herbert Croly, Walter Lippmann, Randolph Bourne, and Van Wyck Brooks" (Ph.D. dissertation, University of Wisconsin, 1967), そして James Hoopes, *Van Wyck Brooks: In Search of American Culture* (Amherst, Mass., 1977) を利用している。
- (30) Van Wyck Brooks, "America's Coming of Age," in *Van Wyck Brooks*, ed. Sprague, 82-83. この長い評論は、もともとは1915年に別々に出版されたものだが、後に *Three Essays on America* (New York, 1934) の一部として発行された。1958年のアンカー社のペーパーバック版では、America's Coming of Age が全体のタイトルになっていた。Spragueはその「序文」の中で、Brooksは『『ハイブrou』と『ロウブrou』という用語が、その後知識人の間で広まったことに対して、その造語に対してではないとしても責任がある』(xviii) と記している。
- (31) Spragueは「序文」(x-xi)の中で、その時期に弁証法パターンの利用は一般的であったと指摘し、また直接にHegelからではなく、むしろCarlyleやColeridgeを通して、その手法にたどり着いたのかも示唆している。
- (32) Brooks自身が心を寄せていた伝統は、John Ruskin とMatthew Arnold, William Morris を經由して、H. G. WellsとGeorge Bernard Shawまで拡がっていた。Brooks は、工業主義の文化侵食への関心から、経済的な洞察力に大いに依存する公然たる社会主義者の態度への移行について、十分に理解していたわけではなかったが、Wells やその先駆者たちがもつ考え方の組み合わせを見つけて、それが彼に養分を与え、彼自身のアメリカ批評の言葉を提供する手助けをしてくれた。Van Wyck Brooks, *The World of H. G. Wells* (New York, 1915) と "America's Coming of Age", Sprague, "Introduction," esp. viii, Wasserstrom, *The Legacy of Van Wyck Brooks*, esp. 21 を参照。
- (33) Van Wyck Brooks, "On Creating a Usable Past," *Dial*, 64 (1918), 337-341. *Van Wyck Brooks*, ed. Sprague の中で再版。引用は225-226, 223。
- (34) Brooks はアメリカの文化的変容における移民グループの役割について、Bourneよりは幾分かさめた熱意を示したが、彼は現在の文化は借り物の文化であると信じていた。なぜなら「あらゆる人々は、自分自身の発展に最も致命的に貢献するものを、それが何であれ、他のすべての人々の経験から選び出す」からであった("On Creating a Usable Past," 224)。この点に関しては、Hoopes, Van Wyck Brooks, 119を参照。
- (35) 知識人の中での新しい価値体系に関わる多様な文献と実例をもっとよく見るためには、David A. Hollinger, "Ethnic Diversity, Cosmopolitanism, and the Emergence of the American Liberal Intelligentsia" *American Quarterly*, 27 (1975), 133-151を参照。Hollinger は、「Bourne は非常に多くの知識人にとっての文化的ヒーローとなる宿命にあったので、彼がこの見解を支持したのは、インテリゲンチヤの発達研究に特に関係している」(133n) と記している。
- (36) Randolph S. Bourne, "The Jew and Trans-National America," *Menorah Journal*, 2 (1916), 277-284; "Trans-National America," *Atlantic Monthly*, 118 (July 1916), 86-97. 両作品とも、*War and the Intellectuals: Essays by Randolph S. Bourne, 1915-1919*, ed. Carl Resek (New York, 1964) で再版され、ここでの引用は、Resek; 版の124, 125, 117-118, 123, 122からである。
- (37) Bourne, "The Jew and Trans-National America," 128. Bourneは特に、*Nation*誌に載ったKallenの論文(1915年)に言及した。
- (38) Higham, "Ethnic Pluralism in American Thought," *Send These to Me*, 212, 207.
- (39) Bourne, "The Jew and Trans-National America," 131.
- (40) Bourne, "Trans-National America," 123. Bourneは恐らく、当時のもっと大きな外国との関連を評価して、「インテリゲンチヤ」という言葉をイタリック体で印刷している。
- (41) Brooks, *The World of H. G. Wells*, 68-69. Bourkeの "Culture and the Status of Politics," esp. 178-184におけるBrooksのプラグマティズムに対する態度についての議論を参照。
- (42) Randolph S. Bourne, "Twilight of Idols," *War and the Intellectuals*, ed. Resek, 63.
- (43) Van Wyck Brooks, "Our Lost Intransigents," *Freeman*, 3 (August 10, 1921). *Van Wyck Brooks*, ed. Spragueで再版。引用は240ページから。
- (44) Hollinger, "Ethnic Diversity," 138.
- (45) Malcolm Cowley, *Exile's Return: A Literary Odyssey of the 1920's* (1934; reprint ed., New York, 1951), 110-111.
- (46) See T. S. Eliot, "Tradition and the Individual Talent," in *The Norton Anthology of English Literature*, rev. ed., ed. M. H. Abrams et al. (New York, 1968), 1813, 1808. Eliotはこの評論を、*Egotist* (1919) と、後には *The Sacred Wood* (1920) で出版した。
- (47) 20年代初めのモダニストの著作に対する *Seven Arts*誌グループのBrooksや他のものたちの反応に

- 関する議論は、Aaron, *Writers on the Left*, 77-80を参照。
- (48) *Seven Arts*誌と*Dial*誌との関係については、William Wasserstrom, *The Time of the "Dial,"* (Syracuse, N.Y., 1963), 71-77を参照。Foster Damonが発した「政治なしで」という文句が、Wasserstromの議論の中で引用されている。
- (49) Sherman Paul, *Edmund Wilson: A Study of Literary Vocation in Our Time* (Urbana, Ill. 1965), 28.
- (50) Edmund Wilson, "Imaginary Dialogues: The Delegate from Great Neck," *The Shores of Light: A Literary Chronicle of the Twenties and Thirties* (New York, 1952), 143-144, 149, 150.
- (51) Paul, *Edmund Wilson*, 32, 36, 34-35. Brooksに対するWilsonの恩義が、Paulにおける持続するテーマのように見える。Paulが見るつながりの例として、44, 46, 80, 93ページを参照。
- (52) Malcolm Cowleyが作成した、1891年から1905年の間に生まれた236名の文化人一覧表の中で、Wilsonだけが「文学者」というタイトルを与えられている。*Exile's Return*, 311-316.
- (53) Edmund Wilson, *I Thought of Daisy* (New York, 1929). Sherman Paulの*Daisy in Edmund Wilson*, 53-76, 54での議論を参照。Edmund Wilson, *Axel's Castle: A Study in the Imaginative Literature of 1870-1930* (1931; reprint ed., New York, 1959), 2, 19.
- (55) 検討された他の作家の中で、Proust, Joyce, そしてYeatsは、「現代のヒーローであり…論じられるというよりは説明されていた。」そしてValeryとSteinは偏りと過剰の例であった。Paul, *Edmund Wilson*, 86.
- (56) Wilsonの積極的なEliot評価としては、Wilson, *Axel's Castle*, 99, 111, 112, 114, 124を参照。
- (57) WilsonがEliotのことで頭が一杯であったことに関しては、Paul, *Edmund Wilson*, 84を参照。Paulはまた、*Axel's Castle*の中で、「WilsonはBrooksの*Letters and Leadership* (1918)のテーマについて述べている」(80)と記している。
- (58) Wilson, *Axel's Castle*, 102, 105, 126.
- (59) *Ibid.*, 119-126.
- (60) *Ibid.*, 294-297.
- (61) *Ibid.*, 293.
- (62) William Phillips, "The Wholeness of Literature," *American Mercury*, 75 (Nov 1952), 107.
- (63) Lionel Trilling, "Edmund Wilson: A Backward Glance," *A Gathering of Fugitives* (Boston, 1956), 49, 50.
- (64) Abel, "New York City," 255.
- (65) Elazar, "American Political Theory and the Political Notions of American Jews," 213.
- (66) Nathan Glazer, *The Social Basis of American Communism* (New York, 1961), 130. ユダヤ人ラディカルの際立った存在は、時としてユダヤ人と周りの社会との間に、またユダヤ人自身の間でも、摩擦を引き起こす場合があった。両方の種類の緊張が、James Rortyが描いた、1934年のマディソン(訳注: ウィスコンシン州の州都)にあるウィスコンシン大学の描写の中に明らかである。「社会的にも政治的にも、大変に未発達で。ラディカルはニューヨークのユダヤ人であり、そのようなものを冷笑した…。マディソンのユダヤ人商人は、ラディカルのユダヤ人学生を呼び集め、彼らに少しばかりその理想主義を犠牲にするように求めた。何故なら彼らのせいで、ユダヤ人にひどい名前がついているからだ。」James Rorty to Winifred Rorty, November 5, 1934, Rorty Papers, University of Oregon Library, Eugene, Oregon.
- (67) Daniel Bell, "The Mood of Three Generations," *The End of Ideology: On the Exhaustion of Political Ideas in the Fifties*, rev. ed. (New York, 1962), 299; Howe, "A Memoir of the Thirties," 350. ユダヤ人社会におけるラディカリズムの重要性を控えめに扱う二・三の試みがなされてきた。たとえばLewis Feuerは、自分がロウアー・イースト・サイドで、たくさんのラディカリズムが成長するのを目撃したことを否定している。しかしながら、Feuerでさえ、社会主義者のパレードやデモを見たことを認め、あらゆるアメリカの少年がもつ特徴ではなく、ラディカルな党派の意識があることを示唆している。"The Legend of the Socialist East Side," *Midstream*, 24 (1978), 23-35を参照。
- (68) Daniel Aaron, "Some Reflections on Communism and the Jewish Writer," in *The Ghetto and Beyond*, ed. Rose, 264の中で引用。
- (69) こうした文学的な伝統が持続していることを、多くのものが記している。たとえば、T. B. Bottomoreのコメント、「合衆国におけるマルクス主義の流行は、主として文学的な知識人の間で起こり、19世紀の終わりに起こった彼らのアメリカ社会からの疎外は、別の形で引き続けているように私には思われる。」*Critics of Society: Radical Thought in North America* (New York [Vintage Books ed.], 1969), 39.
- (70) Lionel Abelは、「誰かを『一流のマルクス主義者』だと褒め称える…立ち退き反対者を思い起こして」、自分もそのような賞賛を得るために、マルクス主義者になるべきかどうかという問題に興味を持ったことを思い出している。彼だけではなく。「その考えが…私の知る大半の人々の心の中に入り込んだ。そして間もなく、私たちがマル

クス主義者になるつもりか、なるつもりはないのかなど、もはや問題にもならない時が来た。唯一残っている問題は、私たちのうちの誰が『一流のマルクス主義者』になるかであった。」 Abel, “New York City,” 256-257.

(71) Aaron, *Writers on the Left*, 207.

(72) *Writers on the Left*, 193-200で、Aaronのこの時期の説明を参照。またWalter B. Rideout, *The Radical Novel in the United States, 1900-1954: Some Interrelations of Literature and Society* (Cambridge, Mass., 1956), 128-131も参照。初期 *New Masses*誌におけるGoldと「リベラル」の違い、この雑誌をGoldから引き継いだものに伴った悪感情が、James Rortyの未刊行の自叙伝の原稿の中で論じられている。“It Has Happened Here: The Memoirs of a Muckraker,” Rorty Papers. またRorty文章の中に、「*New Masses*誌の役員会」に宛てた、Goldと彼の支配欲に対する7ページにわたる攻撃の原稿が含まれている (undated correspondence file)。

(73) Aaron, *Writers on the Left*, 98; 204の中で引用。

(74) Richard Pells, *Radical Visions and American Dreams: Culture and Social Thought in the Depression Years* (New York, 1973), 167. Aaron, *Writers on the Left*, 164の中で、Goldが引用されている。

(75) Aaron, *Writers on the Left*, 164, 188の中で引用。

(76) Rideout, *The Radical Novel*, 226.

(77) Granville Hicks, “The Crisis in American Criticism,” *New Masses*, 8 (Feb. 1933), 5. Rideout, *The Radical Novel*, 226の中で引用。

(78) *New Masses*, 6 (Dec. 1930), 22. Aaron, *Writers on the Left*, 209の中で引用。

(79) Granville Hicks, *Part of the Truth* (New York, 1965), 100, 101.

(80) Edmund Wilson, “An Appeal to Progressives,” *New Republic*, 65 (1931), 235, 236, 237, 238; *The Shores of Light*, 518-533で再版。

(81) *Ibid.*, 238.

(82) Wilson, “The Literary Consequences of the Crash,” *The Shores of Light*, 497, 499.